

礼拝 2023年10月8日(日)
題 『赦し・信仰・奉仕』
テキスト：ルカによる福音書17章1～10節

皆さま、おはようございます。

本日の聖書の個所の小見出しには「赦し、信仰、奉仕」とあります。
宣教の題はそれに習ってつけました。

「赦し、信仰、奉仕」の部分をよく見ると、内容的には1節～4節までが「赦し」の部分で、5節～10節が「信仰・奉仕」の部分だと思えます。
この個所は主イエスが教えとして語られています、1節の冒頭は、

「1:イエスは弟子たちに言われた。」とあります。ここでの「弟子たち」とは、12弟子だけではなく、12弟子以外にもイエスについて行った人たちはいたのでむしろその人たちに向けた教えではないかと思われます。

また後のキリスト教会となっていくグループの人たちの最初の群れです。
ちなみに、5節には「使徒たちが」となっていますので、これは12弟子に対する教えです。厳密に分けることはできないかもしれませんが、概ねそうではないかと思えます。

1節から4節ですが、イエスは自分について来ていた人々に言われたのです。後の教会生活を送る信徒たちへの信仰生活の心がまえともうけとめれます。これは今を生きているわたしたちに対しても当てはまる教えだと言えるでしょう。「つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸である。」とありますが、「つまずき」とは何でしょうか。「つまずき」とは、「罪へのいざないやさそい」と言われます。調べて見ると「誘惑」とも説明されています「罪」とは、新約聖書の言語でありギリシア語では「ハマルティア」と言われます。それは、放たれた弓矢の矢が的とは違う方向に飛んで行く姿を表していると言われます。つまり、イエスの群れの中にある人々が、心を神やイエス・キリストとは違う方向に向けている状態のことです。そのようなことは起こりやすいのです。イエスの群れの中で日常の中でまた大きな動きがある時などには見える形で起こって行くことがあるのです。これは誰が悪いとか良いとかという問題ではないのです。どのような人にも起こりえるのです。

ですからイエスは集まっている人々に対して、「つまずきは避けられない。」と言われるのです。問題は、また問題になることは、さけることはできるはずだということだと思えます。しかし、「だが、それをもたらす者は不幸である。」と言われます。あの人、この人ということでもないようです。

つまずくというと、石や段差などにつまずくことを思いますが、つまずきは「誘惑」とも理解されていますが、誘惑とは、わなをかけて獣(けもの)をとらえることから来ているようです。

「つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸である。」

2:そのような者は、これらの小さい者の一人をつまずかせるよりも、首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである。

3:あなたがたも気をつけなさい。もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。

4:一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』

と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

悔い改めと赦しの大切さです。悔い改めとは、イエスと神にたち帰ることです。自らの言葉と行いを反省し改めること。また信徒同志、赦し合うことの大切さが教えられているのです。自分は罪を侵さないように気をつけなければなりません。罪を犯した人が赦しを求めてきたら、何度でも赦してあげなさいと。7回とは、完全数です。何度でも赦してあげなさいということです。イエス・キリストが弟子たちやひいては私したちを赦してくださった、赦してくださるのだから、信徒の同志でもそうしなさいということです。

次に「信仰」についてです。これはイエスの選ばれた12弟子への教えとされます。「赦し」について中には不安になった弟子たちもいたかもしれません。事実、弟子たちの中にはこの後、イエスを裏切ったユダもいたのです。

5:使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」と言ったとき、

6:主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」

「信仰」とは、神を信じる力と言って良いと思います。

キリスト者は、誰でも、神とイエスを信頼したい、信じたいと思うでしょう。弟子たちの中にもこれからのことに対する不安や心配また恐れもあったでしょう。5:使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」という気持ちも、わたしたちも分かるように気もするのではないのでしょうか。

そのような弟子たちに言われます。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。この時、弟子たちは、信仰を量のように思っていたようです。多いか少ないか。わたしもそう思うこともあります。しかし、信仰は量で

はなく、イエスと神にすぎる一途な意思そして告白だと思うのです。イエスは、「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。からし種は、地上で一番小さな種だと言われます。

しかし育てば、その枝に鳥が宿るまでに桑の木のように大きく成長するのです。「この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」とは、少しオーバーに聞こえますが、小さくとも真実でひたむきな生きた信仰は、神に届きのです。神が驚くべき業を成してくださるのです。わたしたちも小さな者でも、小さな群れでも、そこに真実な神への生きた信頼がある時、小さな信頼が大きく用いられていくのです。イエスにあって、善き力なる神さまが働いてくださるからです。

最後は、「奉仕」についてです。イエスはたとえ話で教えてくださいました。

7:あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。

農業をするか、牧畜を行うかの場面です。主人としもべの関係です。

ここでは主人は信徒たちのリーダである12弟子と考えられます。僕とは、他の信徒たちと思われます。これからの困難な旅路を歩むであろうイエスの選ばれた愛する、大切な弟子たちへの教えです。

8:むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と言うのではなからうか。主人・雇人は雇われた人より、先に食事をするのが当時の習慣であり常識だったようです。

これは、神と弟子たちの関係でもあります。神は主人、弟子たちは神のために働く雇人です。

9:命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろ

うか。10:あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。」本当の主人とは天と地をお造りになった、命の源の神さまのことです。

本質的に言って、弟子たちは、イエスにならって神に守られこの地上で良き働きを成していくのです。弟子たちは、自分の力だけでは、神の働きをまっとうできないのです。奉仕の力も神と主イエスが与えてくださるのです。

9:命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。

ですが、イエスは愛する弟子たちに、最後の晩餐の時には食事を弟子たちに与え、その席から立ち上がって、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいで、弟子たちの汚れた足を洗ってくださったのです。

10:あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをただけです』と言いなさい。」これはイエスさまが、この世で父なる神に従う中で思われたことだったのです。イエスは、愛する弟子たちの模範になられたのだと思います。ですから弟子たちとはじめわたしたちも、愛なるイエスの姿を思って語り、行うということに尽きるのではないかと思わされたのです。これから先、イエスは十字架の待っているエルサレムの町へ向かわれたのです。今日の「赦し、信仰、奉仕」を、わたしたち一人ひとりにイエスさまが教えてくださったこととして受けとめ、神と聖霊の助けを頂きながら、人間関係の中で行っていければと願います。

皆様の上に主の平安をお祈りいたします。 共に黙想いたしましょう。